

B-32 染色布の複合染色堅ろう度試験 I. 反応性染料

昭和女大 ○鈴木孝子 昭和女大短大 矢崎千尋, 小ノ沢治子

目的 染色物の堅ろう度については、JIS規格に基づき、各染料の項目別等級づけが行なわれているが、その等級は、各項目が独立した形で行なわれている。我々は染色布に及ぼす諸条件を實際に着用する場合に、より近い条件下、つまり複合での堅ろう度結果を知ることが目的として本研究を行なった。今回は、近年使用量も多く、手軽に適用でき、かつ堅ろう度も比較的高い反応性染料について実験検討した。

方法 使用染料は、反応性のフゾ系より日光、洗たく、汗堅ろう度の異なるものを用い、常法（冷染法）にて綿布を染色し、堅ろう度は、日光のみ、汗と日光、汗と日光と洗たく、汗と洗たく、洗たくのみの組合せにて処理し、これを繰り返して行ない、色差、明度、純度、主波長を色差計ND-K6B型にて測色し、単独の堅ろう度試験結果と比較検討した。なお日光試験の1回は、ブルースケール3級が標準退色する迄とし、汗はD法、3ルギニンを含む汗液の2種類とした。洗たくは、ターコトメータ（120 rpm, 40℃, 30分）洗剤は、石けん、合成洗剤を使用した。

結果 ①色差—日光堅ろう度の低い染料は日光のみの色差が大で、洗たくすることにより色差が低下した。他の染料は、汗と日光と洗たく処理の色差が大であった。②明度—処理の重なったものの変化が大で、JISのD法より3ルギニンを含む汗液の変化率が高い。また洗剤間に差が見られ、石けんが大であった。③純度—染色布は低下するが、その傾向は色差と同様で、複合処理により変化率が低くなる染料もあった。④主波長—いずれの処理条件においても、変化はごく僅かであった。